

## 新平誠洙 時のまにまに

新平誠洙の絵画を見た者は、その中に一貫して流れる、時間についての取り組みを容易に知覚することができるだろう。2014年、ジャズ・ピアニストのビル・エヴァンスが演奏する映像からモチーフを得たシリーズ「Bill with T」では、流れゆく映像の中の一瞬を切り取り、それぞれに少しずつれた時間軸を持つタブローを横一列に並べることで、切断された時間とその繋がりを同時に示した。つづく2015年のシリーズ「Reflection」では、異なるふたつの風景や人物を、それぞれの層を限界まで薄く削ぎ落とすかのように描き重ね、なお混じり合うことのない像として表した。ビル・エヴァンスの居並ぶ壁面の、その画面と画面の間には確かに、作品としては掬い上げられなかった時間の襞が見える。重ねられた二人の異なる顔と顔の間には、ゼリーのように凝固しつつも揺らぐ時間が閉じ込められている。絵画における新平の試みは、こうしていつも横に縦に、見えない収縮と拡張をはらんだ時とそのはざま—つまりは時間を—画面に留めることに成功している。

これらに続く「Inversion」シリーズでは、走る牛を描いた画面をコマ送りで撮影し、絵画と映像をともに展示することを試みた。カット割りされた糸吊りのカンヴァスに描かれた牛と、それを連続して撮影することで走るように再構成された牛の映像は、映像から時間を抜き出して絵画とした「Bill with T」のいわば逆再生であり、新平の絵画における時間への取り組みは、映像という伴走を得てより明確に画面周辺の空間にまで拡張していくこととなる。

そしてこれらすべての作品には、新平が言うところの「ノイズ」が深く刻まれている。それは「Bill with T」を横断する走査線であり、「Reflection」を分割する十字であり、「Inversion」の牛の体に切り込む斜線として、画面上に鮮やかに現前する。ロザリンド・クラウスはその著作「見る衝動、見させるパルス」において、モダニズムの追い求めた「視覚の自律性」を解体せしめるものとして「ビート、リズム、パルス」を提示した。新平が画面に描くこれらのノイズこそまさにその記号化であり、作品と対峙する者はこの印を楔として、自らが見たい像を選択し、そのみを見るよう促される。描かれた時間と描かれなかった時間のどちらかを、時間のわずかな揺らぎもそのままに閉じ込められた二重の像のどちらかを、走る牛とその周りを跳ね回る斜線のどちらかを、「見る」と選択した瞬間にそれ以外の選択肢を容赦なく捨てざるを得ない。そこに「視覚の自律性」はもはや跡形もないが、同時にかすかな愉悅を感じるのは私だけではないだろう。失われた選択肢を振り切る強さを、生きる強さに読み替えて、選択したのちには目を閉じて時間の流れに身をまかせる—何かを「見ない」と決めることで得られる安心や赦されるような感情を否定することはできない。

二年にも渡る厄災の日々のなか、我々は様々な情報に翻弄され、それを取捨選択しながら、この目と頭と体ひとつで戦ってきた。情報の正誤は語られる口と受け取る耳によってはいとも簡単に裏返され、極端な判断の中に潜む部分的な賛成／反対には目を瞑らざるを得ず、何かを見ないことで何かを見ること、つまり何かを選ぶことを決定せざるを得なかった。何かを見ない（信じない）と決めて打ち込む楔は重く、その重みと判断の正誤は、未来も含めて自らの肩にのしかかっている。災禍と祝祭が同時に進行したこの夏を経て、2021年のこの時、新平が新たに取り組んだ今回の試みにおいて、ノイズはふたたび絵画と空間の中に提示される。それを目の当たりにした時、おそらく我々はこの日々の中で、何を見ようとしてきたかよりも何を見てこなかったかを思い出すだろう。明滅するノイズの中で、前進し、生き抜くために捨ててきたものを時のはざまに見る時、なおこの手の中に残るものを知ることができるだろうか。